

# 今宮釜ヶ崎の特異性

塩 井 文 夫

昭和十年秋より、不圖も雑誌「社會事業研究」連讀の便を與へられた自分は、爾來同誌に就て幾多先賢名士の御高説を拜讀し、爲めに自己職司の遂行上は勿論、修養上にも多大なる裨益を受け、今や本誌は自分の生活に缺くべからざるものゝ一となつたのである。今回、此の貴重なる本誌に寄稿を求めらるゝの光榮を擔つたものゝ、何等纏りたる意見を掲げて諸賢に見ゆるといふ能力の無き自分ではあるが、聊か茲に駄筆を執り、日常自分の眼に映じた今宮釜ヶ崎の特異性一端と小見を述べ大方の御批判、御高教を仰がんとするものである。

◇  
今宮釜ヶ崎は、曾て本誌に於て今宮保護所の郡主任も述べられた如く、往時は津江の庄と云ひ後亦名古の濱と呼ば

れた風光明媚な海濱の一部であつた。後徳川時代に及びて刑場が設けられ、更に大阪七大墓地の一人でその最古のものと云はれた飛田墓地が出来たのである。大大阪市の中心部にも近き此の地釜ヶ崎が、急激なる都市の發展にも順應せずして、寧ろ反對現象を辿り一大集團スラム街を形成するに至つた所以のものは、一は現時社會經濟機構の下に於ける必然的の現象ならんも、其の主なる素因は、明治中葉時代迄も永く殘骸を止めぬたりし刑場、墓地等の陰慘なる雰圍氣が、此の地をして斯くは發展を阻害せしめたものなりと想像し得るのである。まこと現時の釜ヶ崎は大きく且つ暗い、釜ヶ崎部落の細民大密集街なることはあまりにも有名であり不名譽な事實である。それは大阪一と云はれ、日本一と云はれ、時には世界に類例を見ざるスラム街なりとも

稱せられる。部落民は明け暮れ轉々として常に移動が頻繁であり、又一定の住居を有せざる屋外浮浪生活者所謂ルンペン級が無數に蜷集し居り、随つて當部落の正確なる數字を把握することは極めて至難の事に屬するも、概數世帯は三千餘に上り、人口一萬五千を數ふことが出来る。部落には目下六十五戸の木賃宿と六の公私宿泊所があり、之等の施設に居住するものゝみにても優に五千を突破する。

釜ヶ崎の地區は、西成區の東北端に位する西成區東入船町、西入船町、東田町、東四條通一部の一帶を指して云ふも、就中東西兩入船町最も甚だしく細民密集し、足を一度此の地に入るゝや忽にして一種異様な感を覺へしむるのである。



實例「昭和十一年十月二十五日夜八時、東入船町の〇〇屋といへる木賃宿の或る三疊の一室、十三才を頭に六人の幼兒が薄い蒲團一枚の下に行儀よく寝かされ、何れも靜かに夢の世界を彷徨してゐた。その傍には印刷屋の外交をする四十四才の虚弱な父と、辻占賣をする三十四才の母とが物變げに座り、眠れる兒等を見守り乍ら手を組んで思案に

汲々としてゐるのである。されば彼等の生活は明日を知らぬ今日の生活、全く利那的の生活であり、其の日の食事は其の日に稼ぐ、夕方夫や母が稼いで來た幾等かのお金を、家で待つ妻や子が持つて三合五合の米買ひに、三錢二錢の醬油買ひに走る騒ぎと苦しみを經てやつとその日の夕餉は頂けるのである。幸にして濡かる日はそれでよいが、稼ぎの無い日、雨の日さては病氣にでも胃されやうものならぬにして収入は絶たれ、一家は空しく天を仰いで僅に水を啜ると云ふ悲哀である。

近時方面委員の救済も餘程進歩徹底してゐるが、多くは一時的應急的の救済に止まり、生活の根本的立直しは如く容易ではなく、一度落込んだ最低度の生活から更生することとは至難で、此儘藻掻きに藻掻き苦しみに苦しんで遂に一生を終るのではないかと思はれることすらあるが、我等は飽迄方面委員への協力に意を用ひ、最も理想的な救済と、限りなき熱意と愛とを以て、彼等の一人でも多くを救出すると共に防貧にも力を致して、第二の細民を作らざること



暮れてゐる」格別病人があるらしくも思はれぬが、兎に角只ならぬ思案の様子に自分は靜かに寄つて其の譯を尋ねたが「何もないのです」とて答へない、重ねての問ひにも何故か口籠りて答を憚るのである。然し最早此の上は重ねて問ふを要せない、否問はないのが禮儀だ、我等は問はずして彼等一家の生活を、彼等夫婦の心裡を讀まねばならぬと思つた瞬間、自分の眼には一杯の涙である。只一言「元氣を出して暮しなさい、そして心配のある時は何時でも遠慮なく言つて來なさい」と言殘して次への巡視を續けたのであつた。彼等夫婦が此の夜愛兒の寢姿を見守りつゝ果して何を語り何を考へつゝあつたかは、賢明なる讀者諸士の御判断にお委せすることとするが、兎に角自分は現實に貧困者の家庭に臨んで見て始めて感を新にした一事例である。

部落民の生活は實に悲慘であり低級である。前述せる如き事實は到る處に見られ且常に繰返されつゝある部落生活の現象だ。中には自己意思の缺陷から自ら貧困を招いて尙飽かないものもあるが、多くは永年の生存競争に敗れ、疲れ果てた落魄の同胞のみであつて日夜パンを求めらるることに

釜ヶ崎に於て敢行せられる犯罪の數は夥しきものがある。多くの居住者が無智であり、逆境の極に達し更に自制心を失つたものである必然的現象とでも云ふか、部落には日夜窃盜傷害、暴行、賭博等々非社會的事犯が、辻々に見張りを付けて迄も我々の眼を窺うては行はれてゐる。部落には到る處に屑物寄屋、古物屋、古靴屋等無數に在り盜品の賣捌きには極めて好都合に出來て居り、又犯人の隠れ場としては恰好の木賃宿非常に多く、更に部落の東方には飛田遊廓がある等で、府下で行はれた犯罪被疑者（時には京都、奈良等近府縣下の犯人も潜入する）は多く釜ヶ崎に隠れ、贓品を賣捌く爲一度はキツト足を入れるのである。警察の視線は彼等より一足先きに木賃宿、遊廓、古物屋等の場所注がれてゐて、殆どは檢舉されつゝあるのだが、他により以上の逃避場を見出し得ぬ犯人は、猶多く此の地に足を踏入ては檢舉の網にかゝつてゐる。部落を彷徨するものと雖ビンと我々の六感に映する程度の者は多くは何等かの非違を犯してゐる。住民に前科者の多いことも釜ヶ崎の特色である。刑事は晝夜の別なく活動してゐる。受持巡査派出所員も全く不眠不休で活躍してゐて、毎月釜ヶ崎で今

宮署員が檢舉する犯罪だけでも僅に二百件を突破する、それに部落へは他署の刑事も日々多数入込んで相當の犯罪を檢舉して行くと云ふ現狀である。

風紀の頹廢は釜ヶ崎の一大特質で、住民の多くには節操觀念の如き殆どそれを見出す事を得ない。夫婦關係に於ても正式な戸籍上の手續を経たものは極めて稀で、大部分は内縁の儘である。夫が一度入獄するか、旅へ出稼でもすると、妻は逸早く情夫を作り且つ之を引入れて得々として暮してゐるが、別に部落民はそれを怪異ともせず平然としてゐる。夫が歸る間隙になると逃出するものもあるが、格別紛争も見ずして又元の鞘に納つてゐるものもあると云ふ實に亂脈な生活振である。又季節の及ばず彼等への影響は一層強いやうである。陽春の此節の如き毎日幾人かの人が訪れ、夫や妻、娘の家出、さては夫婦間の争迄も訴へるのである。現在一般社會の風教必ずしも安堵を許さぬものあるを聞くも、釜ヶ崎のみは全く無軌道の字を以て盡されてゐると云へる。

密賣淫、變態性慾者等所謂闇鳥の拔扈、之亦部落不名譽の一大特色である。密賣淫は主要之を(一)親抱、(二)自前住してゐる。減少したものは神戸、名古屋、長柄等遠近の各地へ移動したもの、轉向して郷里へ歸れるもの或は仲居やとな、幫間等に轉業したものが大部分を占めて居る様であるが、折角歸郷しながら闇の稼業が忘れられず窃に元の親方を頼つて來販するものもある。

私娼の存在を認めるか否か、認めるとすれば如何なる方策を講ずべきかの問題は他日の研究に譲るとして、苟も現在の狀勢下に於て之を取締らんとする以上は、尠くとも近隣府縣は齊一を期する必要があるのではないかと思ふ。何故なれば、彼等は近くは天六、鶴橋、天王寺遠くは東京、大阪、名古屋、神戸間等取締の緩漫に應じて常に移動を続け、よし局部的に減少したとするも又一方他の地區へ増加し依然として非違を敢行してゐるからである。又我々は淫賣の因つて生ずる根源をよく究明し、事前に之が豫防に關する諸般の對策を講じなくてはならない。更に自分は、此の

嫌惡すべき淫賣の存在を考察する前に、今尙而も相當有識階級に屬する人が好奇心に藉られてか如何か、盛に闇の女を求めて來つゝあることにも検討を加へなくてはならぬと思ふ。單に報酬として交易する對價にてもそれは此處に關

「流し」、(三)美人局の三種に分類することが出来る。親抱とは親方と稱する媒合常習者に抱へられたもの、自前とは主として新世界、飛田筋等の盛場を流して客を曳き、宿屋間借等に連込んで淫行をなすもの、美人局とは夫婦者であり乍ら妻に賣淫を爲さしめ、夫が之を見張るものを云ふのである。淫賣は紋日等一日實に數十人の客を取り多額の對價を得てゐるものもあるが、中には親方等に搾取せられて、一日の収入は皆無のもの乃至は二十錢位のものもあるといふ。

變態性慾者は、俗にオカマと稱する男性である。彼は男性であり乍ら先天的に或は後天的に、女性的心理を有し、立居振舞、言語等全く女型で中には全然女の服裝容色を造るものもあり、勿論専ら本能的に同性にのみ愛着を覺えるものであつて、更に又一定の夫を持つて据養ひをしたり、所謂賣淫行爲を事として暮すと云ふ洵に厄介な存在である。

密賣淫、變態性慾者等通じて以前は實に數百を算したものであるが、近時可成峻嚴なる取締を連續し一面保護善に力むる關係で、餘程減少したがそれでも尙百數十名は居する限り多くの場合限度がなく、所持金は全部強取を受けるのであるが此にも増して大なる危險は性病である。この肉體的損失は到底一身に止まらずして、延て永く子孫に迄も及ぼすに至る戰慄すべき危險なるに不拘、何を好んで恐ろしき淵に飛込むのであらうか。現在今宮地區にも多くの救療施設があるが患者の大半は花柳病だといはれる所すらある。又之を一度國民保健の上から觀、壯丁検査の成績等から考察しても、淫賣の流す害毒は實に圖り知るべからざるを想ふ時、罪は單に一個のスラム街や密賣淫にのみ有るのでなく一半は其の相手方にも存することを認識し更に一般社會は、連帶して之が匡正の一大啓蒙運動を起すの要あることを痛感して止まない。

本年三月部落民八・〇二五名に付て調査した教育程度の狀況は次の如くである。

- 大學卒業者 一六名
- 同 中退者 三名
- 專門學校卒業者 二八名
- 同 中退者 六名

同 在學者 二名  
 中等學校卒業者 一五二名  
 同 中退者 一三三名  
 同 在學者 三九名  
 高等小學卒業者 九六三名  
 尋常小學卒業者 二、四九五名  
 同 中退者 一、三一二名  
 尋常高等小學在學者 九二〇名  
 不就學者(現在學齡中) 一三九名  
 無 學 者 八五〇名  
 未就學兒童 九八七名

計

八、〇二五名

最高學府を卒へ、専門學校を卒へて相當な職業を持ち實直に生活してゐるものもあるにはあるが、大部分のものは部落の長屋や木賃宿、宿泊所、寄屋等に住み教會の下級布教師や人夫、旗持、拾ひ屋の如き自由勞働者に落込んでゐるのである。彼等の落込む経路も大體他の階級と大差なく精神上、肉體上何れかに可成り償得ない程の缺陷を持つに因つたものであり、更にその多くは前科を有つてゐるが、彼等が罪を冒すに至つた動機、事由等は普通人のそれより

も一層複雑な道を通つて居り、隨つて斯ふ云つた者の更生は極めて至難ではないかと考へられる。表に示す如く中等學校卒業者、同中退者等も相當あるに反して、文盲者の數も高く殊に看過の出来ないものは、現在學齡中であつて就學しないか乃至は長期休學せる兒童の數實に一三九名を見ることがある。而かも調査に當つてその保護者達は、この事實を相當秘めてゐることも想像出来るから、恐らく實數は之以上に上るであらう。

家庭の都合や、本人の怠惰で休學する兒童の率は相當高い、一回の部落巡視に於ても必ず數名のそうした兒童を發見するのであるが、斯く可憐な兒童が家庭に在つて如何なる生活を營みつゝあるか、又此の兒童達が踏む未來の道は果して如何なるものであらうかを想ふ時、其處には自らある種の戰慄さへ覺ゆる。極悪な環境裡に在つて純眞性を蝕まれつゝ育まれる兒童こそ、實に悲惨であり可憐である、保護者から深夜の辻占賣を強ひられる、薪拾ひを命ぜられるのは未だしも、窃に曲つた行爲すら教へられる、子供の間食は殆ど無制限に近い、其の日の生活にも追れる家庭でも十五錢二十錢は平氣で買喰ひさせてゐる。兒童が集れ

ば將棋をするベツタをする、獨樂賭をする等々所謂射倖行爲に耽る。十二・三才にもなれば博打も一通りは覺えるともいはれる。淫賣ゴツコをする、小盜をする、石を投げ石や木片を敷いて電車の妨害をするといつた具合で、日々を過して居り、解放された學童の、家庭にあつて眞面目に復習等してゐるものは極めて稀である。一部の學童は學校から學用品一切の支給を受けるが、それすら見る間に破つたり壞したりして、頓と學校へ行かない子供さへあるといふ、洵に悲しむべき現象が日々隨所に散見せられる。

畏くも 陛下の赤子として齊しく此の世に生を享け乍ら其の場所を此の地に得たばかりに、幼少から斯くも傷ましい横しま道を進まなくてはならぬ、何といふ悲哀な現象であらう。勿論一半の罪は兒童側にも存すると云へやうが、その大半は保護者が負ひ家庭が負ひ、延ては社會が負はなくてはならない。第二のルンペン、第一のスラム街を作らず、第二の社會をより明朗に、より健實にする爲各種社會指導家は、之等兒童の保護と教育に付ての一層の御勇奮あるやう祈つて止まない。

釜ヶ崎地區を対象とした教育施設としては、今宮第三小

學校、徳風勤勞小學校、四恩學園保育部、みのり子供園、自強館保育部等があり何れも夫々高潔な蘊蓄を傾けて、兒童の保育、教養は勿論更に兒童を通じて家庭の淨化に、日夜涙ぐましい程の積極的御活躍があつて、我等の常に敬服して止まない所である。斯くして釜ヶ崎は急速度を以て必ずや淨化されるだらうことを信じて疑はないが、永年培れに培れた部落の惡習淨化、況してや兒童の教育選善には、凡ての社會事業家の熱烈なる協力があつて、初めて有終の美果を收め得ることは茲に再言する迄もないことである。



警察が直接社會事業に携はることは元より警察の本然の職司ではない。然し警察も廣義の意味合からは、社會事業の一部を分擔してゐると云へないことはない。況や社會生活の各層に亘り警察を必要とせざるもの殆ど皆無なるに於てをや。然し狹義の社會事業は矢張り所謂社會事業家をして煩はすべきは勿論である。けれども今宮に關する限りは、警察が單なる警察のみの觀念を以て進む時は、必ずや部内の實情に副はぬ、部民の生活に即せぬ方向に赴き、部民と乖離する結果を生ずるに至るのであつて、署長以下一

巡察に至る迄、警察官であると共に圓滿なる社會事業家であり、教育家であり更に宗教家なりとの信念の下に、克く部民と時代の推移に順應して進むことを要するのであつて、即ち部民の保安、幸福の爲に、凡そ部民が要望し、信倚する所に向つては、夫れが多少本然の範疇を逸したりとするも、他施設の権限を冒さざる限度に於ては、積極的に民衆のよりよき相談相手となつて、最大限度社會に奉仕するだけの度量と決心を以て日常の職司に當らなくてはならない。斯くすることに依つて初めて、警民融合を圖るは勿論、思想の善化にも裨益し、惹て幾分かの犯罪原因を剪除し得たとするならば警察の目的はより效果的に達せられたりと謂ふべきであらう。斯様な見地に發足して、今宮署に於ては大正八年釜ケ崎部落に出張所を設けて特務員を置き、之を常駐せしめて今日に至つてゐる。部落特務員は、密集部落の保安維持に任じ、學校、方面委員、社會施設、其他地方有識階級等と密接なる連絡協調の下に、部落民の指導、遷善、生活向上に務め以て部民の康寧、地區の淨化改善の爲に必要な一切の事務に當るのである。當署が釜ケ崎改善の爲に執りつゝある方策は二、三にして止まらな

いが之が内容の記述は他日に譲る。

◆ スラム釜ケ崎の淨化を目して、社會から差延べられた愛の手は相當廣く且つ多く、地區には府、市、私設の各種社會施設は多數存在するが、從來此等相互間の連絡協調が果して圓滑に運ばれてゐたであらうか、實狀は必ずしも然りと斷ずることを許さなかつた様に聞及んで居る。

凡そ、公人として社會に貢献せんとするの士は、飽迄一身の利害や感情に捉はるゝことなく、全く私を滅して公に奉ずるの信念と勇氣を持たねばならぬ。各種の社會施設が、私情を去つて何處迄も圓滿なる協調連絡を要する所以のものも、主眼は此處に發足したものと謂はねばなるまい。茲に鑑る所ありて昭和十年九月、今宮地區社會施設各主擔者並に有志の崇高なる決意と努力、府市當局の援助に依つて結成されたのが「今宮社會事業研究會」である。同會は今宮地區方面委員、一般社會施設、教育家、宗教家、警察官吏、公吏、有志等々凡そ地區に在つて、一般庶民の指導的地位に立つものが齊しく協同し、所謂一圓融合して横の連絡を密接にし、而して各自の職司を圓滑に生かし以

て地區改善進運の上に、最大の効果を收めんとするものであつて、寔に喜ばしき企圖であると謂はねばならぬ。現在會員數は六拾餘名に上つてゐるが、今宮地區以外の方面よりも是に賛同して参加さるゝ士亦漸次増加の傾向にある。同會は毎月一回會員が順次各事業所を會場として集り、定例研究會を開催して、各種の議題を持ち寄り研究すると共に諸般の懇談を遂げてゐるが、爲に近時、地區の社會施設其他會員相互間によく和合し、協調連絡を保つに至り、完く舊來の面目を一新し極めて明朗裡に、事業能率の向上を圖られつゝあるのである。

惟ふに、凡ての社會施設、凡ての職能、凡ての階級が夫々時と場所及その方法を分つて働きつゝあるとは雖、之等は儘に一聯の有機的關係を有し、更にその窮極の使命は何れも明朗社會の實現に有るのであつて、社會施設の爲の社會施設でなく、職能の爲の職能でなく階級の爲の階級では毫もなくして、此を大乗的、綜合的見地より觀察すれば、齊しく同じ高嶺の月を目指して登りつゝある同胞の道であり、その間各相互間が圓滿に手を引合ひより早く目的地に到着するを要すべきや寔に當然である。敢て毛利元就の古

事を引例するまでもなく、協同の力が如何に強くそして美しく且つ正しいものなるかはあまりにも明瞭な大理道である。就中各種社會事業施設相互間の夫れは特に必要である。その圓滿なる協調あるか否かに依つて、一般被救済大衆に及ぼす明、暗各様の影響亦實に甚大である。彼此思を致す時、社會事業家の使命たるや寔に重大であり任務や實に光榮である。されば愈々操守碎勵、熱誠事業に専念して皇國永遠の隆昌の爲に、奉公の誠を盡さなくてはならぬと愚察する。

以上記述した二、三の事項は、今宮に於ては極く小部分の事に屬し、地區には尙諸般の特異現象が存在し之を廣く紹介して諸賢の御批判と御示教を仰度ひと思ふが、亦餘を他日に殘して擱筆することにす。

お肌を荒さぬ刺心地

安全替刃の最高峰：

青チレット